

完全的中予報との差の約 1/3 が埋められることになっている。

この結果は簡単なモデルにもとづくものであって、実際の問題に応用するにはまたいろいろと工夫が必要であろう。しかし、確率予報が従来のカテゴリー予報の情報内容を包含するより内容豊富な情報であり、利用の仕方次第でより大きな利用価値を引き出せることは明らかである。今後、このような確率予報への認識が進むにつれて、降水以外の天気現象（風、気温など）や、天気現象以外の予測にも採用されるようになるものと期待し

ている。

参 考 文 献

- [1] Lund, I. L., Estimating the probability of a future event for dichotomously classified predictors. *Bull. Amer. Meteor. Soci.*, 37 (1955), 325-328
- [2] 立平良三：確率予報の精度の評価。測候時報, 48 (1981), 93-97
- [3] 立平良三：確率予報の現状と将来。気象, 25, 6 (1981), 3-5

特 集 に 当 っ て

小 林 竜 一

オペレーションズ・リサーチは未経験または、きわめて経験の乏しい分野の問題に対して最良と思われる対応策を探し出すことを目的とする場合が多い。場合が多いと言うよりは、そのような場合に活躍すべき学問・技術であると言っても言い過ぎではない。なぜなら、多くの経験（記録）がある場合は、統計学による分析や、経験をもとにした小改訂の連続によってより良い解を見出すことが可能な場合が多いからである。

さて、経験に乏しい問題へのアプローチとなれば、頼るのは自分の知恵だけであり、問題の本質をよく吟味して、それを数学モデルとして構築するか、類似の現象を見つけてシミュレーションを行なうかということになる。

この2つの方向でのORの研究でしばしば現われるのが確率の概念であろう。そんなわけで、ORの中で確率の概念はどう使われているかを各方面の方々に書いていただくことにした。

そんなわけで、この特集では確率とは何かを数学的な見地で定義したり、形式論的な議論を展開することは考えなかった。したがって純粋数学の研究者のご意見を伺うことはなかった。

さて、われわれは編集委員会で数回の相談を重ねた。確率が使われると思われる分野はORのほぼ全分野と思われるが、比較的普遍的な話題、すなわち、多くの方が興味を示されると思われる分野の話を収集することにしたらどうか。たとえば、受験の場合の確

率の利用、投票予想の場合の確率の活用法などである。しかし、これらは適当な依頼先が見つからないうちに期限がくるなどのために今回の企画の中に入れることはできなかった。このようにして結局のところ読者のご期待に添えないとしたら、それはわれわれの努力と企画の不充分とお詫びするほかはないが、とにかくお忙しい各界の方々のご好意とご協力が得られて本特集を刊行することができた。この点に関して執筆者および座談会にご出席くださった方々に感謝申し上げたい。

さて、このようにして発行された特集を読まれて、読者の方が確率についてどう結論を出されるか。ご意見は編集部にお寄せいただけるとありがたいと思うが、ここで私も1つの疑問を述べさせていただいて、皆様のご批判をおおきたいと思う。

まえにも述べたとおり、ORとは未経験の分野にふみ込むための科学である。したがって未経験の事柄について確率を使わなくてはならない。それがきわめて幸運にも、先験的確率（机の上で考えられる確率）を想定できるような場合なら確率も上手に使えるだろうが、経験的確率しか考えられない場合にはどうしたら良いだろうか。科学技術が進み、社会システムが進むとき、そのようなケースは増大する一方で、しかもその問題に対する決断の重要性もまた高まってきている。このような環境のもとで、大胆に、しかし賢く確率を使う方法はあるだろうか。